

語る こと

大阪スタタリングプロジェクト

会長 東野晃之

ことば文学賞は、今年第15回を迎える。吃音と共に生きる体験を皆で共有したい、吃音やことばについて多くの人と語り合いたいと、毎年、詩や随筆、体験記などを募集し、たくさんの作品が集まった。設立40周年記念文集として刊行した「吃音を生きる」～吃る人々の体験集～には、主にことば文学賞の入選作を編集し、掲載した。「吃音を生きる」は、大阪吃音教室の新しい参加者に渡される資料となっている。

ことば文学賞をはじめたきっかけは、毎週金曜日の大阪吃音教室で当初から行われる、話す、読む、聞く、書くなど、コミュニケーションを高める講座の「書く」をテーマにした「文章教室」だった。文章教室では、皆が自分の吃音の体験を文章に書き、出来上がった文章は皆の前で読み上げられた。吃音で悩んできたこと、苦しかったことを文章に書くことは、自分の吃音の体験の整理になった。また文章に綴られた他人（ひと）の吃音の体験を知ると、普段のミーティングでは知らなかったことが多く、互いの理解が深まった。

文章を書くための技法も皆で学び合った。元新聞社の文芸部の記者を講師に招き、一般的な文章の書き方や文章の添削指導も受け、「一つの出来事に絞って、丁寧に書く」など人に読んでもらう文章の書き方を学んでいった。

文章が上達していく嬉しさは、書くことの楽しさにつながった。書かれた文章は、自分史の一部を切り取った体験記である。それを皆の前で読み上げることは、自己の開示となり、また他人の自分史にも触れる経験となる。毎回、この時間が好きで心地よかったのは、自分を語り、相手の語りを聴くというセルフヘルプグループの醍醐味だからだ。

初めて大阪吃音教室に参加し、自己紹介をして吃音に悩んできた体験を話した。皆が真剣に耳を傾ける態度に、自分の悩み、苦しかった体験が否定されず、受けとめられているという実感が伝わった。誰にも吃音を相談できず、一人ぼっちで悩んできた者にとってこの経験は、やっと得た心安らぐ時間だった。自分を語れる場や語る相手の仲間がいるありがたさが身に沁み、自分を語る大切さを知った。

大阪吃音教室のミーティングでは、新しく参加した人などから、就活の面接、朝礼や会議などの人前での発表、電話応対など、吃音に関する悩みごとが常に話題になる。その話を聞きながら同じような場面で自分はどうか対処したか、過去の出来事が瞬時に思い出される。そして役に立ちそうな経験であれば発言している。また、ある人の吃音の問題を皆で考え、話し合うとき、同じように自分の体験と照らし再考する。結果として自分の過去の問題が整理され、過去の体験への意味づけが変わる新しい発見をすることがある。

大阪吃音教室での体験のわかち合いや吃音体験を文章に書き、発表することは、自分自身の体験の再考や整理になり、過去の体験の意味づけを変えていく。会の活動に継続し参加する人たちは、その作業を繰り返し行うことにより自分の過去の吃音の体験を再生し、様々な吃音に関わるとらわれなどを解放していくのだ。

ことば文学賞の入選作が数多く掲載される、「吃音を生きる」の体験集は、私が出会った吃る人、吃音とユーモア、親の気持ち、子どもの気持ち、吃る人の仕事、職場でのサバイバル、吃音を生きる

いうジャンルに分け体験記が編集される。吃音とユーモアで好きな作品に、「吃音だからこそ結婚できた私」がある。友人の結婚披露宴で、お祝いの言葉をどもりながら話した。披露宴に出席していた人の中に、「この人は緊張してうまく話せないのだな。でも友人のために、一生懸命に頑張る姿は友達思いのまじめな人間だ」と思ってくれる人がいた。縁があつてその人の娘さんと結婚した話である。こんな体験記に出会うと、「吃音はマイナスでしかない」、「食べる私と結婚してくれる相手はいないに違いない」と考える人は、価値観を揺さぶられるだろう。吃音の体験を文章に書くのは、本人にとって意味のあることだが、その体験記が読まれることで、今、吃音に悩んでいる人を励ます他者貢献になる。吃音の苦悩だけではなく、吃音と共に生きる体験が語られることは、「吃音でもいいか」という自己肯定感を与えてくれる。文章を通じて語る意味は大きい。

吃音だからこそ結婚できた私

木村一夫（35歳 会社員）

人生のひとつの節目に、「結婚」がある。私自身、結婚するまでは、「食べる自分は一生ひとりかも知れない」。「食べる私と結婚してくれる相手はいないのではないか？」とっていた。ところが、実際には、私の吃音が私を結婚させるきっかけとなった。

それは、友人の結婚披露宴で、一芸の余興を披露してお祝いの言葉を話そうとしたときのことだ。「お、お、おめでとう・・・」と吃りながらもしゃべる私を見た披露宴の出席者の中に、「この人は緊張してうまく話せないのだな。でも友人のために、一生懸命に頑張る姿は友達思いのまじめな人間だ」と思ってくれた人がいた。その人の娘の結婚相手を探すとき、一番初めに思いついた相手、それが私だったのだ。

私と友人と娘さん（今は妻）の三人で会ったときも、初対面の女性と話すのが苦手な私は、何の話をしたか、今となっては覚えていないし、また妻も私の吃り吃り話す言葉がよく聞き取れず、何を話しているかよく解らなかつたそう。娘さんは、私と結婚を前提に付き合うか否か迷い、両親に相談した結果、父親の「どもりもひとつの個性であり、少しでもお前がいいと思う人なら付き合いやすい」の一言で、私との交際がスタートし、今に至っている。

妻は今でも言う。「初めて会ったときは、この人は本当にしゃべれる人なのかしらと思った。少し吃ると聞いていたけど、予想をはるかに超えていたよ。付き合いがどうかを、本当に悩んだからね。お父さんの助言がなかったら、今ここにはいなかったよ」と。

「吃音はマイナスでしかない」と考えていた私にとって、吃音が周りの人を巻き込みながら、人生の転機となる結婚にプラスに働いたのは、うれしいことだ。

もうひとつうれしいことがある。何年前だったか、NHKの番組「にんげんゆうゆう」が取材に入った日、たまたま私も参加していた。そのとき、「吃音だから、私は結婚できた」とこの話をしたのだが、初参加の若い女性が最後に、「私は、吃音をマイナスのものとしか考えていなかったが、いいこともあるという話を聞いて、吃音でもいいかなあと思えるようになりました」と発言したことだ。仕事の上では、食べることで困ることは少なくない。しかし、私が幸せに生きることが、若い人の励ましになったようで、うれしい。

今、私の家族は四人となり、週末は子どもの宿題を一緒にしながら、楽しく暮らしている。当然、吃音も私といつも一緒だ。

吃音を生きる～食べる人々の体験集～ 2006年11月発行
NPO法人大阪スタタリングプロジェクト